



TITLE:

(随想)某月某日

AUTHOR(S):

高橋, 明

CITATION:

高橋, 明. (随想)某月某日. 泌尿器科紀要 1961, 7(7): 697-698

ISSUE DATE:

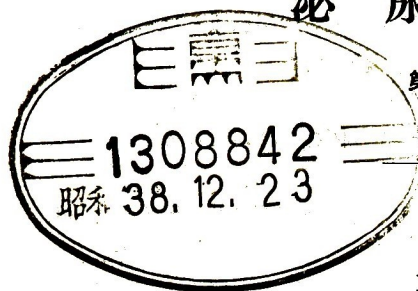
1961-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/112172>

RIGHT:

泌 尿 器 科 紀 要



第 7 巻 第 7 号

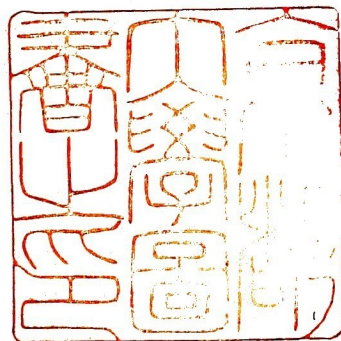
昭和 36 年 7 月

随 想

某 月 某 日

東京通信病院長 高 橋

明



6月24日、土曜日、夜明け方は雨降りであつたが、6時頃には雨はやんだ。6時半に起床、7時に自宅から2町程ある理髪店に行き散髪をして8時帰宅し、応接室で三面鏡の前で、いつもの日課として40年前から励行して来た桜井式紳士体操を約10分間行う。

明治の末期から大正にわたつて、九州大学の解剖学の教授に桜井恒次郎という先生がいて、デンマーク体操に興味を持ち、これを解剖学的に研究して、大正の始めの頃に桜井式紳士体操を編み出し、国内を行脚して体操熱を鼓吹したものである。この桜井教授には一つのエピソードがある。その当時の博多人形が如何にも肺病患者のようで、解剖学的に少しも均衡がとれていないのを難じ、人形製作者に人体解剖学の大要を教授した。それからの博多人形は頗る均衡のとれた健康美を備えたものとなつて来たのである。

桜井式紳士体操の詳細はこれを略するが、要するに約5分乃至10分間で、身体中のあらゆる筋肉と関節とを満遍なく動かして、一日の仕事を始める前に、体の調子を整えるために必要ないわゆるウォーミングアップ式の軽い体操である。私はそれを約40年近く毎日朝食前に、かかさず励行しているが、確かに私の健康保持の上に役立つたと信じている。

普段の日は体操が済むと洗面、食事という順序になるのであるが、今日は理髪をしたので、簡単に歯をみがき、嗽いをしてから食卓に向い朝食を済ませた。朝食はいつもの通り、ご飯一膳、豆腐の味噌汁一椀、半熟の卵一個、牛乳一合、林檎一個と毎日定つたものである。日刊新聞に一通り目を通しての内に9時になり、病院から迎いの車が来たので仕度して9時半登院、諸範の書類に目を通し決裁をすませ、新刊の雑誌を一通り読む内に正午となり、軽い昼食を（トーストと牛乳一合、トマト半個）とる。

午後來客あり、母校独協学園の理事者の訪問を受け、同学園の大講堂新築の件に関し意見の交換を行う。

午後3時に関東通信病院皮膚科部長安田利顕君から招待された同病院皮膚科10周年祝賀の宴に愚妻同伴で参列した。場所は品川駅の向い側にあるプリンス会館である。此所はその昔北白川の宮家のお屋敷跡で、御殿の大半は戦禍に逢つたが、焼け残つた部分に大々的に手を加えて本館とし、更にモダンなヘルスセンター式諸施設を増設したもので、広い芝生や、ゴルフ練習場や、プール其他大人にも、小供にも楽しめるレジャー施設に取囲まれている極めてハカラな、上品な会場である。

この祝賀会は別段に公の祝賀会ではなく、部長たる安田君が部長を拜命してから、今年6月1日で満10周年になるのを機会に、友人知己をも招待してその喜びを別ちたいとの趣旨で、安田君を中心として数年前から結成されていた親睦会、一名ファミリーパーティーの延長という意味で催されたる極めて内々の和やかなパーティーであるということが、司会者や安田君の挨拶によつて明となつた。

私は年長の故を以て、被招待者を代表してお祝いとお礼の言葉を述べた。10年という年月は考えようによつては永いようでもあるが、また過ぎて見ると極めて短いようにも思われる。日頃から学界の先端に行くことをモットーとして常に研鑽を続けている安田君が、今日茲にファミリーパーティーの延長として極めてモダンな祝賀パーティーを思い立ち、且つこれを実行した勇氣と手際のよさとに対して敬意を表しつつビールの杯を挙げ、数々のご馳走を味わった。

今日は6月の最後の土曜日で、毎月一回行われている三越名人会が4時から始まることになっているので、宴会をば中座し、愚妻諸共日本橋室町の三越百貨店に車を走らせた。三越劇場に着いたのは5時過であったので、既に第1の杵六会の長唄土蜘蛛と、第2の石田天海、おきぬの奇術マジック アドリブとは終り、第3の徳川夢声の物語、新釈西遊記の終り半分から聞いた。いつもながら夢声翁の話術は天下一品であり、たいしたものと感じた。次は都一中、都一千恵を中心とせる第4番目の一中節の椀久道行があつて30分間の休憩となつた。

休憩後の第5番目の出し物は、珍らしく楠トシエ唄、ピアノ今井ひろし、アコーディオン荒井儀宰の伴奏で、「コミックソング」という名人会にはふさわしからぬ曲目である。しかしこの会に一陣の新鮮味を吹き込む上に、たまにはこれもよいと思つた。彼女としては、名人会に出演させて貰つたことに感激し、頗る張り切つて体当りで歌いまくつたので、満場の拍手がしばし鳴り止まなかつた。

第6番目は、柳屋小さんの落語^{とうなす}南瓜屋で、古くからある話で、幾度も聞いたことのある落語ではあるが、近來むくむくと名人上手になつて来た小さん師の軽妙な言葉まわして話されると、何度聞いても面白く感ずる。全く芸の力であると思う

最後の第7番目の出し物の上方舞は高谷伸作詞、富山清琴作曲、吉村雄輝振付の地唄「濡標」（みをつくし）であり、立方は吉村雄輝、地唄は富山清琴（盲人）、はやし方は藤舎呂雪という役割りである。

「春は曙のぼのと、まず初声の日柄はじめ、いつも変らぬごひいきと、たたく太鼓も小びたいも、打てばそらさぬ抜目なさ」と清琴の美声の地唄につれて、吉村雄輝が、しづしづと舞い始めた。始めの内は一本調子のように思われたその地唄の中に、次第次第に上方の風景が、しみじみと流れ出て来て、何ともいえぬ楽しさにひきつけられて行く。「笑うも泣くも世の中は、暮、正月の裏表、きのうの鬼もにこにこと、愛想交して行き違ふ。宗右衛門町、笠屋町、思い思いにかざりたて……」と終りに近づくにつれて益々引きつけられて行く。日頃東京風の舞踊を見馴れた私の目には、この上方舞は大変に目新らしく、如何にもさわりが柔かで、今日一日中の肩のこりが、すっかり消え去つて軽くなつた感じが全身に広がつて嬉しかつた。

名人会は8時少し前に終りを告げたので、都電で帰路につき。ひと風呂浴びて9時半頃寝に就き安らかな眠に入つた。

昔私が東大皮膚科の医局員であつた頃に有楽座で、春秋2回名人会が行われ、その頃の名人、富士松加賀太夫、吾妻路宮古太夫（三味線）の新内や、常磐津松尾太夫、同文字兵衛の常磐津や、先々代の柳屋小さんの落語、芝金や虎エ門の「やりさび」など江戸風の演芸の外に、大阪から豊竹呂昇や東広など錚錚たる女義太夫さんが乗込んで来て、真に名人会らしい芸を競そつたものである。

その頃邦楽殊に浄瑠璃など全然知らなかつた私ですら、呂昇の上京を待遠しく思う程のファンになつたことを思い出す

三越名人会は終戦後に開始されたもので会員制度になつていて、毎月最終の土曜日の午後4時に開演し、8時前後に終ることになつている。そして今回で第137回に達した。私は10年程前から会員となり、毎回都合をつけて出席し、愉快な一夜を過ごすことにしている。